

中野重治集

36

日本文学全集



中野重治集

日本文学全集 36



筑摩書房

日本文学全集 36 中野重治集

昭和四十五年十一月一日発行

著 者 中野重治

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 株式会社鎗木製本所

中野重治集 目次

中野重治詩集

歌のわかれ

むらぎも

春さきの風

村の家

空想家とシナリオ

五勺の酒

広重

素樸ということ

「暗夜行路」雑談

五

四五

一〇九

三二四

三三二

三四〇

三九九

四一九

四二九

四三七

年譜

人と文学

平野

謙
四三

四三

口絵写真撮影

大竹新助

中野重治集

2).

こがら立つし入としたりのぐそれではあつや
幾何学^の西洋^のを^は園^をはむろくがいはと
いふので全くの園をしあつと木しある花は
はいていころころある。雁来紅^はどが。雁来紅とい
う文^をな^をする。時ホーのつおみ菜^があり。酢
味噌^の。そこを^はおんか^がある。どうい
う時^のめ^をする。世^は面^は狭^い。あきせといつて
いふ。そこを^は花^をは^はく。野^を菜^をは^はく。手^を入^をめ^を
く。しかし^はあき^をは^はく。あき^をは^はく。どういふ集^を
あき^をは^はく。あき^をは^はく。あき^をは^はく。

中野重治詩集

大道の人々

どこからともなく彼らはやって来た

弱った紋つきの男は高島易断の人相見を始めた
紙をひろげて悪い人相を書いて人々に示した

一つの横顔を上から下へ書いていった

しかし眉や目や口などは

前から見たところを書いていった

彼はうすすべらな書冊をひらひらさせた

そのなかに人の一生の運命が細大もらさず書いてあるとい
った

それを読めば成功うたがないといった

けれどもそれを売る彼は弱った紋つきを着ていた

角帽に袴をつけた若い男は医薬分業改正案を叫んでいた

彼は医者をつくる薬がどんなものであるかを発いて見せた

彼は一枚の紙を示してこれが処方箋だといった

彼をかこむ群集の間から手が出てそれを買いとった

並樹の桜の下に毛布をしいた角刈の男は手品をはじめた

おしまいに彼は自分の鼻の孔へ釘をうちこみはじめた

長い光る五寸釘を鼻の孔に入れて下駄でかんかんたたいた

釘はすこしずつ中へはいつていった

うちこんでしまふと彼はふがふがといつて見せた

そういうあぶなっかしい芸がはじまるまで見物は立って

た

しかしそういう芸がすむと見物はそろそろ歩きだした

大ていは一銭の銭もほうらずに黙って歩きだした

四辻には猿曳がいた

小さな太鼓をたたきながらときどき猿を手元へひきよせた

見物のなげた芋の皮を猿はまたたきしながら器用にたべた

今日はおひがんの中日だ

たくさんお貰いしろ

猿曳が猿の顔も見ないでどなった

どこからともなく彼らはやって来た

数知れずやって来た

砥石

安全剃刀

キンの指輪

おっとせい 蘇鉄の果

夜は夜で朝鮮飴

それからくじびき

彼らは一様にくろい顔をしていた

キンの入れ歯をしていた

あるものは暑いさなかによごれた^{あわそ}裕を着ていた

あるものは木枯しのなかに麻裏草履^{あさうらぞうり}で立っていた

どこからともなく彼らはやって来た

そしてどこかしらこっそりと帰って行った

昼となく夜となく彼らはやって来た

そしてピストルを射ったり大声に叫んだりして人を集めた

ここから内らへはいつてはいけないといって杖で円をかい

た

べらべらとしつきりなしにしゃべり続けた

見物が笑って見ていてくれるとき

自分がよどみなくしゃべり続けられるとき

そのときが彼自身もとても幸福であるかのように

見物が散ってしまったり

見物の集まり具合が思わしくなかったりすると

彼らはとなりのやはりそのような男に話しかけた

その僅かな言葉は

通りすがりの人の耳にあわれにひびいた

寒い地方 暑い地方

諸国をまわって来たその僅かな言葉は

その季節々々の風のなかにあわれにしわがれて消えていっ

た

浦島太郎

今宵^{こんや}は雨がふって

ついその家ではまた蓄音機をはじめた

童女がはかなげな声をはりあげて浦島太郎をうたうのだ

浦島太郎は亀にのり……

乙姫様のお気に入り……

白^{しろ}のじじいとなりにけり

お前もうたってごらん

そしてこれは誰のことをうたったものか教えてくれ

しらなみ

ここにあるのは荒れはてた細ながい磯^{いそ}だ

うねりは遙^{はる}かな沖なかにわいて

よりあいながら寄せて来る

そしてこの渚^{なみさ}に

さびしい声をあげ

秋の姿でたおれかかる

そのひびきは奥ぶかく

せまった山の根にかなしく反響する

がんばりょうな汽車さえもためらいがちに

しぶきは窓がらすに霧のようににもまつわって来る

ああ 越後のくに 親しらず市振の海岸

ひるがえる白浪のひまに

旅の心はひえびえとしめりをおびてくるのだ

爪はまだあるか

お前は

ひろい^{また}臉をまどかけのように下ろして

その陰からいつまでものぞいていた

お前は

そのあいだじゅう爪を噛み

つばきはお前の指さきをぬらした

爪はまだあるか

お前の^{おもかげ}顔をたずねてわたしは鏡のなかに目をつぶる

わたしの^{おもかげ}顔は美しいあのかあてんのようにでない

わたしは十本の指をのばして一枚々々に爪をしらべる

爪のおもては曇って

衰しくれないの色が浮んでいない

それにわたしの爪は

恐らくおいしくはないだろう

爪は お前の爪はまだあるか

あかるい娘ら

わたしの心はかなしいのに

ひろい運動場には白い線がひかれ

あかるい娘たちがとびはねている

わたしの心はかなしいのに

娘たちはみなふつくと肥えていて

手足の色は

白くあるいはあわあわしい栗色をしている

そのきゃしゃな^{かかと}踵などは

ちやうど鹿のようだ

眼のなかに

眼のなかにまっかな斑点があらわれた
青味をおびたうす黄いろの白地に

朝やけのように美しくかたまって
 しくしく泣いているようだ

がらすのすばいどで辛い目薬をたらし
 ずかに見ていると

女を愛するような哀しい思いが湧いて来る

挿木をする

今日は三月二十三日
 灰かにこな雪がちらついて

あたたかな春の彼岸の中日です

おいで妹たち

僕らは挿木をしよう

祖父さんやそのまたお祖父さんたちがやったように

今日はほとけの日で挿木の日だ

雪は僕らの髪の毛にかかろう

そして挿木はみずみずと根をさそう

わかれ

あなたは黒髪をむすんで

やさしい日本のきものを着ていた

あなたはわたしの膝の上に

その大きな眼を花のようにひらき

またしずかに閉じた

あなたのやさしいからだを

わたしは両手に高くさしあげた

あなたはあなたのからだの悲しい重量を知っていますか

それはわたしの両手をつたって

したたりのようにひびいて来たのです

両手をさしのべ眼をつむって

わたしはその沁みてゆくのを聞いていたのです

したたりのように沁みてゆくのを

たんぼの女

そうです

何というおだやかな日和でしょう

空はすっかり晴れあがって黒い鵜が渡って来る

そしてたんぼに 稲の荻株にはひこばえが生じ

そこにあなた方は坐っている

あなた方は三人 小さな筵の上で話をしている

そして通りすがりの私に向っていかにもなつかしげに言葉

をかけてくる

たんぽに坐っている三人のやさしい女の
私もそこへまじりに行きたい

そこへ行つてそこに坐つて

その特別な話が聞いてみたい

けれどもあなた方

あなた方は遊女でわたしは生徒です

えええ ほんとに穏かな日和ですよ

ここはなわて路です あなた方の街の裏の細い一本のたん

ぽ路です

私もそこへ気さくにまじりに行きたいのです

それなのに私は帰らねばならぬのです

さよなら たんぽの女の人

私はほほ笑みを一つ返します

たと日光をお吸いなさい

たんときれいな空気をお吸いなさい

私はもう帰ります

さよなら たんぽの人 たんぽの三人のあなた方

私は月をながめ

私は月をながめ

お前のことを考える

私はお前に逢いたい

月は中空にあんなに光っている

そして私は思い出す

私の足の下を掘つてゆくならばお前の国へ出るということ

を

私の足の下にお前はさかしまになつて歩いて

お前と私とはおなじ月を眺めることができない

雲のない満月もあかい月蝕もひとつも見られない

月の光もお前と私とを一しよに照らすことはようしない

対蹠のくに

なんという遠方だろう

私は月をながめ

私はお前に逢いたいのである

今日も

通りには今日も大勢の女がいて

きらびやかな口をきいていた

みんな行く先があるのか

あかい耳朶をして手をふつて

ずんずん私はおい越された

このひろい東京の町にお前がない

このひろい東京の町にお前がいけないというのはつまりどう
いうことなのだろう

あんな女どもにさえおい越されて

朝から

心をはりつめてはりつめ

顔をあおくして行く先がない

水辺を去る

私はこのしずかな水辺を去りましょう

今日は水さえも私をいとうている

水の心はおとなしい故

それとみずからは言い出さない

ただ私が向うの方へ行くならば

水は彼自身のしめやかな歌をうたい始めるでしょう

私はしずかなこの水辺を去りましょう

水がそれを乞うているようです

夜が静かなので

何事も意にまかせず空しく六十になる父のかなしみが
髭などは白くなって髪をかいて眠っている

大きな不幸でも来るようでしょうちゅう心配でならぬ母の
かなしみが

晩にはいった風呂のせいで頬のとがりにあわれな赤味をさ
して

口をあいて眠っている

その母に抱かれるようにして

その母とさっき泣き泣きいさかいをした

すこし正直すぎる出戻りの姉娘のかなしみが眠っている

みんな炬燵にはいつて眠っている

向うではまだ稚いかなしみが二つ

一つは物どころがつきそめて

一つは何やら何もわからず

おなじ夜着のなかでもう眠入ってしまった

そしてこのうからやからを担いで行かねばならぬ息子のか
なしみが

どうやら火鉢を撫でながらまだ眼をあいている

息子のかなしみはさつき昆布茶を飲んだ

ことごとくというのは汽車にひかれた隣りのびっこ猫だ

庭さきを通るのはあれは風だ

もう二日もすればまた正月である

息子よ

今夜あたしは

そのおろかな記憶をすこし甘やかしてやれ

ぼろ切

こんな古い麻の葉模様なんぞは棄ててしまおう
もうおれには

こんな古いぼろ切を大事にしてしまっておくのが恥しくな
ってきた

ぼろぼと一しよにして

三国の浜へ持つて行つてさっぱりと流して来ることだ

おれはうんと飯を食つて

それから麴をかいて眠つてやろう

人の心のなかへ降りて行くのはもう止しだ

こんどは浮きあがる番だ

さあ浮きあがれ うかべ

このやくざな心臓にささらをかけて

はたきを贈る

大学前の一軒の荒物屋の店さきに吊してあつたのだ

金五銭だったのだ

領にさすわけにもいかなんだ

腰にさすのもはばかられた

おれはその白いふさふさを

通りにいる子供の顔にさしつけてやった

そしてくるくると廻してやった

すると白いふさふさの間で

丸めた眼や細めた眼やのたくさんの笑いが花咲いた
ある笑いの如きはよろこびに揺られて逃げて行った

君は知つていよう

東京というところは兇惡な都会だ

その兇惡さは 影のように忍びこんで来る煤やほこりに映

じている

それに君は毎日 君の生活を あれらの判任官どもの間で

すりへらしている

そしてそのために君の言葉は粗くなつてくるのだ

見たまえ

これは繊維の濃かな哀しい日本紙の手ざわりだ

そしてこれには無邪な少年の笑いの祝福が匂っている

美しい日曜の朝に君の部屋の掃除をして

この清浄な白いふさふさでもって

君は君の書物や机のあたりを払いたまえ

君の心にふりかかって来る煤とほこりとを払いたまえ

そしてしとやかな言葉づかいで静かな半日を憩みたまえ

噴水のように

そいつらのいるのは煙のような遠方で

お前はその方角を指さすことさえできない

そいつらを呼びよせようにも

お前の息は短いし お前の咽喉^{のど}笛^{ふえ}はもう紅くはない

そしてそいつらはどれもこれも

みんな些細^{ささい}なめめしい記憶^{きおく}なのではないか

そんなものにいつまでもかかり合^あっていようものなら

お前の感情は間もなく古びてしまうだろう

そうだ こんなものにかかり合^あっているうちには……

ただそいつらはどれもこれも

めめしい けれど金^{きん}の色をした記憶^{きおく}なのだ

それが金^{きん}の色をしているというばかりにおれは

胸^{むね}を疼^{いた}かしたりしていまだに棄^すてきれないでいるのだ

日本の冬の夜は酒^{さけ}の糟^{かす}売^{うり}りが来て寒い

そしておれの皮膚^{かわ}は彼自身^{かみづみ}の淋^{しみ}しさを感じる

こんな骨身^{こみ}にこたえる寒い夜には

この馬鹿らしい記憶^{きおく}などはしぶきに散らして

夜の噴水^{ふんすい}のように ぼろぼ

それを琴^{こと}にしてせめてもおれは歌^{うた}がうたいたい

蠅

厠^{かづ}のなかにはものうい秋^{あき}の陽^ひがたまっていて

女^{おんな}はどこにいいのか消息^{そくし}もなかった

黒い一匹^{ひとひき}の蠅^はがいてうろうろしていたが

最後^{さいご}におれの下腹^{したはら}のあたりに取りついた

おれは手をあげてそれを払^{はら}ったが

おれは腹^{はら}が立^たって悲^{かな}しかった

垣根にそうて

今こそわかった

あの少年^{せうねん}のように おれも誰^{たれ}かに小包^{こふ}が送りたかったのだ

それがわからないばかりに おれの顔^{かほ}色がもうさつきから

こんなに汚^{きた}く濁^{にご}っていたのだ

少年^{せうねん}は垣根^{かき}にそうて歩いて来る

あの少年^{せうねん}のようにおれも……

その黄^{わう}いろうい色^{いろ}をした香^かいのする油紙^{あぶら}におれは新^{あらた}しい折目^{しりぞめ}をつつけよう

紐を切るとき鉄はさわやかに鳴るだろう
 としてその六面体の重量にはおれの好意が換算してあるの
 だ

その快適な重量は彼の手をやさしくおさえるだろう
 額をかがやかして彼はいうだろう
 や どうも

そこで郵便屋の心が
 はればれと朝のように美しく晴れあがるのだ
 ここから彼へ郵便屋をとおって
 一すじの幸福が虹のようにかかるのが

君 見えないか

これから帰っておれは

早速誰かに手頃な小包を一つ送らねばならぬ

最後の箱

なんという愚かなやつだろう

おれはそれを高い道路に坐って見ていたのだ

機関車をはじめほかの箱どもが

どっしりした重量をはらんで車輪の音をひびかせて行くの

に

そいつはごろごろという音を立ててひっぱられて行くのだ
 四角な黒い図体をして

なかには荷物も何もはいつてないのに違いない
 ごろごろといつていちばんあとから蹴いて行くのだ
 前の箱の腰のところにつかまってどこまでもどこまでも蹴
 いて行くのだ

もう五時間もたてば どこか遠い田舎の線路の上を
 あいつはやはりあんな恰好をして走っているのだろう
 なんという愚かな奴だろう

あいつの愚かな姿を見送っているうちに

おれは少しづつ悲しくなってきた

数えていたその貨物列車の箱数を忘れてしまった

夜の挨拶

また夜が来た

壁の上の影法師君

夜がまた来たのだ

ぼくはちよつと行つて来る

あすこへ行つてちよつと一ぱいので来る

壁の上の兄弟

退屈だろうが

しばらく独りで我慢してくれたまえ

ぼくはじきに帰って来る

そして帰った上でならそれは君

君はまたいつものように

ぼくを泣かしてあすばいいだろう

君の膝のところで

ぼくは大人しく泣いていようから

では君 壁の上の兄弟

ぼくはちよっと行って来ます

女西洋人

どこの国の人だろうなあ

あの人はいいことをしたんだがなあ

なんであんなに赧い顔なんぞするんだろうなあ

汽車のがらす窓は随分と重いんだし

あのお婆さんはその締め方を知らないんだものなあ

それを見兼ねてつい締めてやっただけのことだものなあ

なんであんなに顔の下の方から赧くなんぞなるんだろうなあ

あ

もうずっと上の方まで顔いちめんにまっかだがなあ

親切をしてやったことがあの人には恥しいのかなあ

それともお婆さんがなんぼやっても駄目だったことが

あんまり造作もなくそして人の眼の前でできてしまったの

で

まだ年の若いらしいあの人はいきまりがわるいともいいうの

かなあ

それに

これはまたどうしたというんだろうなあ

あの人のお赧くなるのを見ているうちに

それは少しづつ悲しくなってきたがなあ

少し寒いようで少し恥しいようで……

どうしておれにはこんな事がいつもいつも悲しいんだろう

かなあ

おれやひよっとどうかなってしまふんじゃあるまいかなあ

浪

人も犬もいなくて浪だけがある

浪は白浪でたまなくくずれている

浪は走って来てたまにくずれている

浪は再び走って来てたまにくずれている

人も犬もない

浪のくずれるところには不断に風がおこる

風は磯の香をふくんでしぶきに濡れている

浪は朝からくずれている

夕がたになってもまだくずれている

浪はこの磯にくずれている

この磯は向うの磯につづいている